

【最優秀賞】

マフラー、神戸に届く。

徳山容子・山梨県

とんがり帽子の先端をスパッと切り落としたような形。バームクーヘンのようにしつかりと厚みのあるものもあれば、やせ細ったものもある。百個、いや二百個はあるだろうか、色とりどりのそれが、広間に並べられたたくさんの段ボール箱から顔をのぞかせていた。

「工業用の機械に掛ける毛糸よ。セーターとかニット製品を編んだ余りなの」

そう教えてくれたのは、私の古くからの友人である真弓さんだ。真弓さんの御主人は、地元の大きなお寺の住職で、NPO法人を立ち上げてボランティア活動をしている。阪神淡路大震災から十カ月が経った十一月のある日、私は真弓さんに誘われて彼女の自宅である大きなお寺の広間にやってきたのだった。

「仮設住宅で暮らすお年寄りにマフラーを編んで贈るの。知り合いのニット工場が、ご好意で半端な毛糸を寄付してくれたのよ。あなた、編み物は得意でしょ？ ぜひ協力して」

確かに私の編み物歴は長い。五歳の頃に初めてかぎ針を持ち、夢中で鎖編みを延々とやっていた。処女作は、あやとりの紐だ。

用意されていた編み図を見ると、顎の下で交差させて留めるデザインのミニマフラーだとわかった。これなら簡単に編める。

「出来上がったらこのカードを添えて贈るから、メッセージと名前を書いてきてね」

真弓さんが差し出した幾枚かのカードには、雪だるまのイラストとNPO法人の名称が印刷されていた。

毛糸はどれも細く、何本かを引き揃えて編まなくてはならない。私は色の混ざり具合を想像しながら毛糸の塊を十数個選ぶと、紙袋に入れて家に持ち帰った。

神戸市の垂水区に叔父の一家が住んでいる。阪神淡路大震災があったのは、平成七年一月十七日の早朝。その二日前の十五日に、叔父の長女、つまり私の従姉妹の結婚式があった。場所は中央区三宮のホテル。私の両親は前日からそのホテルに宿泊し、結婚式に参席して翌十六日に東京に戻ったのだった。まさに間一髪のタイミングで事なきを得た。人の運命は本当に予測のつかないものだ実感したのはこのときだった。横倒しになった高速道路、火の海と化した商店街。テレビの画面に映し出されるむごたらしい光景は、映画のワンシーン

ではなく現実なのだ。幸いにして叔父の一家は難を逃れ、自宅も大きな被害は受けなかったが、私がこの災害を対岸の火事と思えないのは、こんな経緯があったからだ。

被災された方々に何かの形で支援がしたいと思っていた。もちろん、義援金には賛同したが、ほかに方法を知らなかった。だから、私は真弓さんの誘いに二つ返事でのったのだ。けれど正直なところ、家や家族を失った方々が、こんなもので心を癒してくれるとは思えなかった。家族で鍋を囲むような温もりも、毛布のように心まで包み込むような暖かさもない、ただのマフラーだ。

普段なら、テレビを見たり本を読んだりする夕食後のひとときを私は編み物に充てた。初めのうちは編み図を頼りに細心の注意を払って編んでいたが、一定の法則を憶えると編み図もいらなくなった。夜が更けるのも忘れて編み進める。時おり手を休めては編み上がった部分を膝の上に伸し、色合いや肌触りを確かめた。マフラーやセーターは毛糸を編んで作るものだけれど、違う見方をすれば時間を編んで作るものだ。私は長年編み物をしながら、そんなふうに感じてきた。ひと目ずつ、律儀に編み進めた時間が形になっていく。

たかがマフラー。されどマフラー。これを手にした誰かが、気に入ってくれますように。織り重ねた私の時間が、その誰かを暖めてくれますように。いつしか私は、そんなことを思いながら手を動かしていた。

三週間で二十本のマフラーを編み、二十枚のカードに「どうか少しでも温かい冬をお過ごしただけですように」とメッセージを書いて真弓さんに手渡した。

年が開け、震災一周忌の慰霊祭がニュースになった頃、私は真弓さんの自宅に赴いた。

「お札の手紙が届いてるの」

そう言って真弓さんが手渡してくれた手紙には、NPOの活動に対する感謝が美しいペン字で綴られていた。差出人は仮設住宅で一人暮らしをしている八十歳の女性。読み進めた私は、後半の部分に自分の名前を見つけた。

『徳山容子様。私には、編み物の上手な姪がおりました。子どものいない私を母のように慕ってくれた姪は、毎年冬になるとセーターや手袋を編んでくれました。震災で亡くなった姪が私を心配して天国から襟巻きを送ってくれたように、涙があふれました』

私のマフラーが、編み物好きな姪御さんを亡くした女性に届いた。ただの偶然。けれど素敵な奇跡。鼻の奥がつんと痛んだ。

「また頼むわ」

真弓さんは、笑ってそう言った。